

## 日常実践を物語る

——セルトーの「なんとかやっていく」論の経験的研究に向けて——

草 柳 千 早

### 1. はじめに

本稿の目的は、M. ド・セルトーの日常実践論の社会的応用に向けて、「日常実践」なるものをいかに捉えるか、その方法について考察し、経験的な研究への見通しを立てることである。セルトーは、『日常の発明—やりかたの技』(1990)<sup>(1)</sup>において、人びとの「日常実践」に注目した。この概念は、「監視」の碁盤目がいたるところにひろがり、ますます精密化するなか (IQ: XXXIX=22)、「既成の諸力と表象の織りなす網の目」(IQ: 35=85)のもとで、人びとの日々「なんとかやっていく」、「もののやりかた」(manière de faire) (IQ: XXXIII=15)、「やりかたの技」(arts de faire) (IQ: XL=24) に光をあてる。セルトーは、日常のこまごまとしたもののやりかた—例えば、街の歩き方、料理の仕方、住まい方等々のうちに、創造性、「押し付けられたシステム」への抵抗、ひいては「反規律化の網の目を形成してゆく」(IQ: XL=23) 可能性を論じた。

いわゆる「社会運動」や「クレイム申し立て」のような目立つ像を結ばず、特筆されることのない日常の「細部」(IQ: 23=XL) に関わる実践に、現状をより生きやすいものとしていく創造性や抵抗の可能性を見ていくこと、これは、社会学においても重要な課題であろう<sup>(2)</sup>。「既成の諸力と表象」の網の目が益々精緻に張り巡らされる現代、セルトーの問いはより切実なものとなっているのではないか。しかし、日常実践に接近することは簡単ではない。というのも、そうした実践は、「あちこちに点在し、いたるところに紛れこんでいる」が、沈黙しほぼ不可視のもの (silencieuse et quasi invisible) (IQ: XXXVII=19) とされているからである。では、それらを見出し研究する方法はいかにありうるのか。セルトー自身、この問題を重視し、研究の要諦と考えていた (IQ: XXXV=15)<sup>(3)</sup>。しかし、こうした方法の問題は、他方ではこの概念を用いて人びとの活動を捉え記述する社会学の経験的研究が数少ないながら試みられながらも<sup>(4)</sup>、十

(1) 翻訳書邦題は意識。原語に合わせた。

(2) 文化人類学の領域では例えば、Scott (1985)、田辺他 (2002)、松田 (2009) 他。

(3) セルトーは、日常実践について、「社会的活動の無明の夜の底のごときものであることをやめ、さまざまな理論的問題や方法、カテゴリー、視点の全体がこの夜をよぎって、それを分析できるようになれば、研究の目的は果たされたことになるだろう」(IQ-1: XXXV=15) と述べる。

(4) 例えば、川端 (2012) のフィールドワークによる研究、末本 (2025) 等。

分検討されてきたとはいい難い。

本稿では、日常実践への社会学的接近の方法について、セルトーの議論に則して考察し、見通しを立てる。以下では、まず日常実践はどのようなものと想定されていたかを簡単に振り返り、その上で、これに接近する方法を検討すべく、セルトー自身の、日常実践に関する理論と方法をめぐる議論を読み解いていく。まず、その研究は何を明らかにするのか、目標とその在り処について確認し、その上で、それらに迫る方法について考察する。要点を先取りすれば、セルトーが提唱する方法は、物語ること、である。では、物語るとは、方法としていかなる営みなのか。ここでは、A. シュッツの生活世界論を一つの手がかりに考察を進め、日常実践論の社会学的研究に向けて、物語るという方法の実践としてのあり方と可能性について、展望と今後の検討課題を示す。

## 2. 隠れたもののやりかた／技

セルトーの議論において日常実践はどのようなものとして想定されていたかを簡単に振り返る。日常実践の形式的な特性については、別稿（草柳 2025）でより詳しく論じた。ここでは、本稿の目的に照らし、押さえておくべき主要な2つの点、第一に、支配的な「システム」に対する創造性と抵抗の可能性、弱者の知略としての政治的性格、第二に、「密猟法」（IQ: XXXVI=17）的な見えづらさについて確認する。両者は、一つの事態の二面であり、セルトーの議論において組み合わせて述べられるため、以下でも分けずに確認する。

セルトーによれば、日常実践は、「システム」によって押し付けられたものの、使い方、もののやりかた／技である。ここでいう「システム」とは、実践がその下で行われる支配的な社会的条件を表す<sup>(5)</sup>。セルトー曰く、通常「使用」「消費」などと呼ばれ、受動的と看做されがちな行為は、もうひとつの「生産」である（IQ-1: XXXVII=18）。日々の都市空間の使用や商品の使用・消費も然り。だが、それらの「生産」は、隠されている（IQ: XXXVII=18）。なぜならそれらは、「固有の生産物によってみずからを表さず、支配的な経済体制によって押しつけられたさまざまな製品をどう使いこなすかによっておのれを表すから」（IQ: XXXVII=19）である。日常実践は、新しいものを一から創造するのではなく、押しつけられたものを利用する、隠れたもののやりかた／技である。

セルトーは、こうした実践を捉えるため「戦略と戦術」という対概念を導入し（IQ: 59=119）、日常実践を戦術的なものとした<sup>(6)</sup>。曰く、戦略とは、「ある意志と権力の主体（企業、軍隊、都市、学術制度など）が、周囲から独立してはじめて可能になる力関係の計算（または操作の

---

(5) セルトーの「システム」概念については草柳（2025）。

(6) この対概念は、セルトーの仕事中最もよく知られた概念であり（Buchanan 2000: 86-87）、日常実践概念を使う研究で、その説明に必ずといってよいほど言及される。

こと」(IQ: 59=119)であり、その前提として、「自分のもの〔固有のもの〕として境界線をひくことができる」、「基地にできるような」、「ある一定の場所」を持つ (IQ: 59:119)。それに対して、戦術とは、自分のものを持たず、「自律の条件」が備わっておらず、「他者の場所」〔自分にとって疎遠な力が決定した法によって編成された土地〕で「なんとかやっついていかなるをえない」(IQ: 60=121)。戦略に対して戦術は、「弱者の技」「密猟」「奇略」(IQ: 61=122)などと表現される。

かくして戦略との違いにより、戦術のありようが描かれ、戦術に寄せて日常実践のありようが概念的に示される<sup>(7)</sup>。「たいていの日常実践（話すこと、読むこと、道の往来、買い物をしたり料理をしたりすること、等々）は戦術的なタイプに属している」、「大部分の「もののやりかた」もそうである」(IQ: XLVII=33)とセルトーはいう。ここで（ ）内に列挙された事柄から、彼の関心が日々のごくトリヴィアルな行い・出来事に向けられていることがよくわかる。

こうした日常実践の形式的特徴を、セルトーの議論から整理すれば、①遍在／散在性、②それゆへの捕捉／特定困難性、③二重／複数性、そして、④既にあるもの使用・消費・操作であることが挙げられる（草柳 2023, 2025）。日常実践は、「無数の密猟法からできあがっている」(IQ: XXXVI=17)。セルトー曰く、こうした実践を通して人は、「否応なくそこで生きてゆかねばならず、しかも一定の掟を押しつけてくる場から出てゆくのではなく、その場に複数性をしつらえ、創造性をしつらえる」(IQ: 51-52=108)。セルトーは、これを、「二つのもののあいだで生きる術 (un art de l'entre-deux)」と表現した上で、「そこから思いがけない効果 (des effets imprévus)」<sup>(8)</sup>が引き出されると論じた (IQ: 52=108)。そしてまた、それは「強者を利用しようとする弱者の知略 (ingéniosités du faible)」にほかならず、「したがって、日常実践の政治化にいきつく」(IQ: XLIV=29)<sup>(9)</sup>のだと。

以上のような議論を踏まえるならば、日常実践は、例えば「社会運動」「クレイム申し立て」など、何らかの顕在的な「運動」や「活動」として社会的に認識され社会学が観察し取り扱うことが可能であるような現れ方をしていない、むしろそのように現れることなく日常に潜んでいる行いである。つまり「日常実践」なる「対象」は、それとして自明に存在しているわけではない。そこで、研究者がある種の行いを日常実践として捉えそれについて書くことはいかにしてなされうるのか、という問題が否応なく浮上する。いうなれば、人びとの日々のトリヴィアルな行いのうちに、創造性や「システム」への抵抗を見出す、学としてのまなざしと方法が問われて

(7) 戦略と戦術を二元的な対立概念として理解すべきでない、I. Buchanan は注意を促す (Buchanan 2000: 86)。J. Ahearne も、両者は必ずしも対立するものではなく、「権力の様々な配置に対する様々な異質な動きを識別可能にしてくれる概念」(Ahearne 1995: 163) であるとする。この指摘は重要である。

(8) 翻訳では「効用」。原語と文脈に即して変えた。

(9) 「戦略と戦術」という「戦争論的な準拠枠」(IQ: 56-57=115-116) が用いられるのもそれゆえである。

いる。

### 3. 目標とその在り処—日常実践のフォルマリテ、民衆の文化と知恵

日常実践への接近法は、具体的経験的な研究に際し、セルトーとその共同研究者らにとって、重要な問題であった。L. Giard は、経験的調査研究編ともいべき『日常の発明』第2巻で記す。「私たちは、方法を定義しなければならず、適用するモデルを見つけなければならなかった。その性質上、地下に隠れており、束の間のものであり、壊れやすく、情動的な諸活動を、描写し、比較し、差別化しなければならなかった」(IQ-2: v=xxxviii)。

ここでこの問題に取り組む手がかりには主に3つが考えられる。①セルトー自身による方法論の考察、②セルトーが参考にしたとする先行研究、③セルトーと共同研究者らが実際に行なった経験的な研究<sup>(10)</sup>。ここでは①を中心に検討する。というのも、②は①へと役立てられ、③は①に基づいているが、方法それ自体についてよりも、方法を適用した調査の具体的成果について主に書いている、その点で、①が最も直接的で有力な手がかりとなるだろう。とはいえ、ここまでの引用からもわかるように、セルトーの書き方は、しばしば修辭的であり、多様な解釈の余地を排除しようとするような一義的・説明的なものではない、つまり端的に決して読みやすくない。だが、重要な論点については、セルトーは、さまざまにいい換えを重ね、その効果として、読み手の解釈を無用に多義的に拡散させず、むしろ収斂させていく。ここには、セルトーの「書き方」の「技」「もののやりかた」が働いている、ということもできるだろう。こうした書き方ゆえに、以下の検討ではセルトーの文章をそのまま引用することが多くなることも断っておきたい。

本節では以下、研究の接近目標—日常実践について何を明らかにしようとするのか—とその在り処について確認する。その後次節で、それらに迫る方法について検討する。

#### (1) 実践のフォルマリテ、操作のロジックの解明

結論を先取りすれば、日常実践の研究において、セルトーが明るみに出そうとするのは、個々の実践のありよう、よりも、それらの実践がしたがう(はずの)フォルマリテ<sup>(11)</sup>、操作のロジックである。

実践についてセルトーは書く。「形もさまざまで、断片的なもろもろの操作は、細部にかかわり、機会に応じて変化しながら、自分が使いこなすさまざまな装置のなかにしのびこみ、姿を隠して、固有のイデオロギーも制度もそなえているわけではないが、なんらかの規則 (des règles)

---

(10) 主に Certeau, Giard, Mayol (1994) に収録。

(11) 翻訳では「型式」だが、forme との区別、また方式、定則、手続き等のニュアンスも考慮し、独自のタームとして原語をカタカナ表記する。

にしたがっているのではないかと考えられる」(IQ: XL=23)。同様に、「諸々の実践にはひとつのロジックがあるはず」(IQ: XL=23-24)、「消費に特有の操作の型 (les types d'opérations) をさぐりだす」(IQ: XLIII=27)、という。さらに、さまざまな手法 (des facons) に対応している「一定数の手続き (des procédures en nombre fini)」、「いろいろな情況のタイプに応じて行動を変えるゲームのロジック (une logique) が存在している」(IQ: 40=91) といひ換えを重ねていく。

要するに、個々の実践に着目しそのありようを記述するなどして明らかにしていくことは、目標ではない。「ひとつひとつ単独のトリックや手口をえがきだすだけでは十分ではない」(IQ: 40=91)。それよりも、諸々の「実践がしたがっているフォルマリテ (les formalités)」(IQ: 40=92) が問題なのであり、そのロジックを解明することが目指されている<sup>(12)</sup>。

## (2) 目標の在り処—民衆の文化と知恵 (ratio)

では実践のフォルマリテを、研究者はどこに求め探り出すことができるのか。日常実践は、いたるところに紛れこみ隠れている、その限りで、「どこ」の答は「いたるところ」だが、それだけでは方法という観点から何の手がかりにもならない。探るべきものの在り処を指し示すにあたり、セルトーは「民衆の文化」「民衆の知恵」なるものに目を向ける。

「ここであつかおうとしている問題は、操作の様態や行動のシェーマにかかわるものであって、実際にそうした操作や行動をおこなったり担ったりする主体に直接かかわるものではない。明らかにしようとするのは、ある操作のロジックなのであり、(中略) いまや西欧を支配している合理性 (une rationalité désormais dominante en Occident) によって神秘化されたロジックなのである」(IQ: XXXVI=16)<sup>(13)</sup>。ここでは二つの重要なことが述べられている。一つは、明らかにされるべきは操作のロジックである、として、実践の主体は問題ではない、とされている。目を向ける先は人ではない<sup>(14)</sup>。第二に、問題となるロジックは、「西洋を支配している合理性」とは異なる、それに対していわば他者であるようなものである。ではそれはどこにあるのか。支配的なものに対して、周縁的なものの領域、である。そして「周縁性」は、小集団やカウンターカルチャーなどに限定されえず、むしろ「広く一般化」しており「大衆的な周縁性」というかたちであらわれているとされる (IQ: XLIII=27-28)。

(12) 日常実践概念を用いる研究では、人びとのある種の行為を取り出し、それをセルトーのいう「戦略」「日常実践」として捉え記述する、といった提示の仕方が散見される (川端 (2012)、末本 (2025) 等) が、このような記述に留まるなら、セルトーが求める研究の狙いからは隔たっているといえよう。他方で、E. ゴフマンの『アサイラム』(1961)における、施設被収容者の裏面生活の研究は、人びとの個々些細な振る舞いの観察から、例えば、「システムの利用」という共通のフォルマリテを探り当てており、セルトーの研究に近い。

(13) 翻訳では「神秘化され、見えなくなってしまうロジック」だが、原文に該当する語のない言葉は削除した。

(14) M. Gardiner も注意を促す。「セルトーは、個々の社会的行為者の活動、意図、自己の利害関心に対してでなく、むしろ実践に含まれる潜在的な「操作のロジック」に、より関心を持っている」(Gardiner 2000: 173)。

そこで、「民衆文化 (la « culture populaire »)」(IQ: XLI=24) に目を向けることが提案される。民衆文化は、「これやら、あれやら、何かをしようとするときの、その「やりかたの技法」として定式化できるもの」「いろいろなものを組み合わせて利用する消費行為として言い表せるもの」であり、そのような実践には「[「民衆の」知恵 (ratio) (une *ratio* « populaire ») がはたらいて」いる (IQ: XLI=24)、とセルトーは述べる。冒頭の「どこ」の答えは、「民衆」の文化に、そして「知恵 (ratio)」に目を向けよ、ということになる。ラテン語 *ratio* は、計算、理性、合理性などとも解することのできるが、「行為のしかたのなかに含まれる考えるしかた (une manière de panser investie dans une manière d'agir)」「ものを使いこなす術と分かちがたい、ものを組み合わせる術 (une art de combiner indissociable d'un art d'utiliser)」(IQ: XLI=24)<sup>(15)</sup>などともいい添えられる。さまざまな実践に一定の知恵が働いている、という論理は、実践とフォルマリテの関係と同型である。

現代、実践のフォルマリテが見出されやすい場所として、セルトーは、①どの社会にもあるゲーム、②民話や伝説、③ものの言い方の3つに言及する (IQ: 40-43=92-96)。①ゲームにおける操作は、「局面に応じて打つ手が変わってゆくような空間のなかでおこわれ」、「さまざまな打つ手を組織化するような規則 (les règles)」や「行動のシェーマの記憶 (une mémoire)」<sup>(16)</sup>「戦術のフォルマリテ (une formalité des tactiques)」<sup>(17)</sup>がそこに見られる。そこには、「実践に特有の合理性」、つまり「支配的な合理性」に対して周縁化された別種の合理性が認められる。そして、「あたえられた (社会的) システムの中でとりうるさまざまな戦術を教えてくれる」とされる (IQ: 40-42=92-94)。②民話には、「日々つかえそうなるまい業、下手な業の模範」が並んでおり、「民衆の戦略のディスクール」を読みとることができる。そこには、「規制秩序の現実にはむかう弱者の武器が保存されている」(IQ: 42-43=94-95)<sup>(18)</sup>。③ものの言い方、例えば民話の「文体のもつ効果やひねりや文の「<sup>フィギュール</sup>彩」、頭韻、倒置、かけ言葉など」も、「こっそり忍ばせた、戦術の生きた博物館」(IQ: 43=95-96)である。ここでもセルトーは、それらを、「科学的理性」とそのディスクールからは排除されているが、「文学的」ゾーンの中で「狡智の実践」として生きながらえているとする (IQ: 43=96)。

以上の例を通して、一つの構図が示されている。一方に、与えられた社会的システム、支配的な合理性、科学的理性、既成秩序等と表現される事態があり、他方に、その下で、それに対して、異なるロジック、とりうる戦術とそのフォルマリテが保存され生きている、その在り処が示され

---

(15) 翻訳書の訳をより逐語訳的に変えた。

(16) 翻訳は「メモリー」。

(17) 翻訳は「定石」と訳され、キーターム (実践/戦術の)「フォルマリテ」がかき消されている。

(18) 日本の例として狂言はまさにこれであろう。主人に仕える太郎冠者の振る舞いには、弱者が自分を守る知恵、狡知、策術が保存されている。

ている。なお、誤解してはならないのは、実践のフォルマリテは、例示されたような場所に例外的に保存されているのではないということ、周縁性が一般化するなか、いたるところに見出せるということである。工場、官公庁、商業部門、学術的な知の機関等々、セルトーは列挙する (IQ: 45-46=99-100)。

以上から、日常実践をめぐって何をどこに見るべきか、およその指針が与えられる。「<sup>アール・ド・フェール</sup>ものなす術」という広大な領域 (IQ: 44=97) に見出されるのは、まずは個々の実践あるいは「出来事 événement」<sup>(19)</sup> (IQ: 41=94) である。だが、それらの一つ一つは、実践のフォルマリテ／知恵の「一個別的適用」 (IQ: 41=94) であり、探究の目標は、後者、実践のフォルマリテ／民衆の知恵である。それらは、個々の場面では確かに実践の担い手によって発揮されるかもしれないが、当の主体個人に占有され帰属しているのではなく、民衆文化のなかの民衆の知恵である限りで、Gardiner が指摘するように「集合的あるいは構造的なもの」 (Gardiner 2000: 173) といえよう。

以上、研究の接近目標とその在り処、探究の眼差しを向けるべき方向について、指針を得た。次に、これらに迫るための方法について、引き続きセルトーの議論を読み解きながら検討を進める。

#### 4. 方法—ディスクールなきものについての物語

日常実践にいかに迫るのか。セルトーは、主にフーコーとブルデューの理論に内在する方法の検討を通して、それを考察している。以下3つに整理し見ていく。要点を先に述べれば、第一に、日常実践に迫ることは、ディスクールなきものについてのディスクールをつくりだすことである。第二に、そのようなディスクールをつくりだす理論は、それ自体日常実践に属する。第三に、こうした理論の実践としての「もののやりかた」「技」として、「物語る」こと、が挙げられる。以下、順に議論の道筋を辿っていく。その道すがら、シュッツの生活世界に関する考察を、議論読解の補助として参考にしていく。

##### (1) ディスクールなきものについてのディスクール

研究することは、ディスクールの生産である。それに対して、日常実践の手続きは、「流動的」で、「ディスクールには結びつかない、あるいはいまだ結びついていない知」 (IQ-1: 75=138)、「ディスクールなき」戦術 (IQ: 75=138) / 実践 (IQ: 77=141) とされる。

では、ディスクールがない、とはどういうことか。セルトーは、理論の進む先について、「言語にしようにも、言語が踏みしめる地面そのものがない」 (IQ: 97=173)、「ディスクールなき活動、

---

(19) 実践が未だ分節化されていないとき、それは研究／観察者にとって「出来事」と見えるであろう。

人間の経験<sup>(20)</sup>のうちで、なんらかの言語で飼いならされ象徴化されたことのないものからできあがっているこの広大な「残り」(IQ: 97=173)などと言葉を重ねる。明らかに、ディスクル化を行うのは研究者であることから、ディスクルがないというのは、第一には、研究者にとって(これまで)、という意味である。だが、実践の直接の担い手ら、社会的世界のなかの人びと、セルトーのいう「民衆」とってはどうか。シュッツを引くなら、社会的世界は、「そのなかで生活し、思考し、行為する人びとにとって、或る特定の意味と関連性の構造を有しており」、人びとはこの世界を「日常生活の現実<sup>リアリティ</sup>についての一連の常識的な構成概念によって、社会学者に先立ってあらかじめ選定し、解釈している」(Schutz 1973=1983: 6=52)<sup>(21)</sup>。その世界は初めから「類型化」されている。いい換えれば、言語的に構成されている。セルトーのいうディスクルなき領域は、人びと／民衆にとっては必ずしもそうではないだろう。

ここでの要諦は、研究者がディスクル化を目指すものは、人びとがその日常的な関心の枠内で言語化しているかないかにかかわらず、人びとの日常的関心とは異なる、研究者の研究という関心から、未だ「ディスクル化」されていない、「主題化」されてこなかったもの、ということであろう。ディスクルなき実践とは、そこそこで密に行われながらもそれとして主題化されることのない／なかった、人びとの日常のさまざまなもののやりかたである。研究者は、それらを、人びとのさまざまな行い／出来事の中から改めて「主題化」「発見」し、それについて書く。目指されているのは、そうした実践に創造性や抵抗性を見出しディスクルにおいて示すことである。では、そのようなディスクルはいかにつくられるのであろうか<sup>(22)</sup>。

## (2) 技の理論／理論をつくりあげる技

要点を先に述べれば、日常実践についての理論は、それ自体、日常実践の手続きと同じく、理論を作り上げる「技」の実践である、とされる。セルトー曰く、「理論はみずからが論じている当の手續きの一部に属する」(IQ: 100=178)。

日常実践のフォルマリテを把握するため、セルトーは、社会学、人類学、歴史学などの諸領域において実践の理論化を図ってきた諸々の先行研究を活用したとするが、特にフーコーとブルデューの理論化の手續きについて書いている。セルトーによれば、フーコーとブルデューの仕事

---

(20) 翻訳では「人間の活動」だが、原語 *l'expérience humaine* に即した。

(21) シュッツは、人びとの構成概念と科学者の用いる構成概念を区別し、後者を人びとが構成した構成概念についての構成概念、「二次的な構成概念」とした (Schutz 1973=1983: 52)。

(22) セルトーは「科学」や「実証」(*l'explimentation*) (IQ: 97-98=174) の方法に批判的である。それらの方法は、「みずからアブリオリに条件を設定し、なにごとであれ、それを「ことばにしうる」ような、固有の限定された領域内でしか事物を扱おうとしない」、「事物をして「語らせる」ことができるようなモデルと仮設の碁盤割りをひいて事物を待ちうけ」、「質問装置」によって「事物の沈黙を「回答」に、したがって言語にかえてしまう」のである (IQ: 97-98=174)。

は、「同一の操作シェーマ」をもつ、「実践の理論の「つくりかた（マニエール・ド・フェール）」の二つのヴァリエーション」という（IQ: 98=175）。両者に共通する理論操作は二つのモメントに要約される。第一に、きりとること、第二に、ひっくりかえすこと、である（IQ: 98-99=175-176）。レトリカルな表現だが、きりとるとは、「ある任意の織りものを裁断していくつかの実践をきりとると、それらの実践をあるひとつの特別な地域としてあつかえるようにすること」（IQ: 99=176）である。フーコーは多様な権力のなかから「一望監視的」手続き・テクノロジーをきりとると、ブルデューはベアルヌヤカピリア地方の人びとから彼が「戦略」と呼ぶ実践をきりとると。そして、いずれにおいても、切り離され隔離されたものは、空間全体のメトニミーと考えられる、つまり一部分でありながら全体を代表するものとみなされる（IQ: 99=176）。

第二は、こうしてきりとられた一部位をひっくりかえすことである。セルトーにいわせれば、その一部位は、「仄暗いもの、語らぬもの、遠くにあるものから、理論を照らしだすディスクールをささえる要素へと反転させられる」（IQ: 99=177）。まさにディスクールなきもののディスクール化（ディスクールの主要素化）である。こうしたことが理論の手続として、どのように行われるかについて、セルトーの分析を読み解くことは難しい<sup>(23)</sup>。ここで可能な限り要点を述べるならば、次のようになるだろう。フーコーにおいては、「監視のすみずみにはりめぐらされた諸手続き、ディスケールによって根拠づけられないマイクロな諸装置、啓蒙主義とは異質な諸技術」（IQ: 99=177）（傍点筆者）<sup>(24)</sup>が見出され、「一望監視的」手続き（IQ: 99=176）として、彼の「理論を支える要素へと反転」される。ブルデューにおいては、「ディスケールの秩序からすれば侵犯的で多型的な狡智にとむ「戦略」によって組織化される特定の不透明な場」（IQ: 100=177）（傍点筆者）が転回させられ、彼の実践・ハビトゥスの理論の鍵となる（IQ: 100=177）。

かくして両者とも同様に、「ことば無きもの、黙せるものとして隔離した実践を理論のきり札にかえ、この闇の地域をして光輝く鏡と化し、そこにみずからの解明のディスクールの決定的要素を映し出す」（IQ: 100=178）。レトリカルには別表現でも、論理としては明らかに同じことが繰り返されている。セルトーはこれでもかと繰り返し要約を試みる。両理論は、「同一種目にふくまれるもののなかからひとつのカテゴリーだけを取りだして考察し、そうした隔離された一部分にメトニミー的な価値を措定し」、「それ以外の実践は不問に付しながら、みずからの製作を保証している手続きを忘却に付しているが、だからといってそれらが手続きに支えられていることにはかわりない」（IQ: 100=178）。

(23) 両者の理論化の手続きに関するセルトーの検討について、その妥当性を吟味することは本稿の手に余る。ここではセルトーが二人の仕事についてどのように考察しているかの整理に徹する。なお、対象を認識し理論化する手続きについては、二人もそれぞれに考察している（Foucault 1969=2012、Bourdieu 1980=1988等）。

(24) 原文に即して部分的に訳し変えている。例えば、翻訳書の「手続き」「装置」「技術」は、原文では複数形であるため「諸」を補った。

こうしてフーコーとブルデューに共通の技をとりだしながら、「理論の名において実践を考察しているディスクール」には「ある技がはたらいている」、とセルトーは述べる。セルトーが2人の理論から共通に掬い上げたのは、そうした「技」に他ならない。「技の理論」は、同時に「理論をつくりあげる技」でもある (IQ: 117=203)。

セルトーのこの論理にしたがえば、日常の実践についての研究とは、研究対象である日常の実践が「もののやりかた」であるのと同じように「もののやりかた」であることになる。ここから、日常の実践に接近する研究が行うことは、理論的なディスクールを編成する技芸、実践とそのフォルマリテについての、ものの書き方の技を実践すること、といえよう。ではそれは、より具体的にはどのようになされうるのであろうか。この問いは、日常の実践の社会学的研究という課題において私たちは何をするのか、何についてどのように書くのか、という問題に直結する。

### (3) 物語ること—フィクションの空間の創造

上の問いへの回答は、簡潔に示される。「語りの技 (un art de dire)」、「物語 (un récit)」の実践、端的に、物語ること、である (IQ: 118=205)。「物語は同時にこの技の実践でもあり、理論でもあるはず」 (IQ: 118=205) とセルトーは述べる。

セルトーは、これまでの議論を半ば繰り返しながら次のことを主張する。第一に、もののやりかたとは、「理論の対象になるような営み」を指すだけでなく、「理論の構築を編成してもいる」 (IQ: 119=205) ということ。つまり、もののやりかたを研究しようとする理論にはそれ自体、もののやりかたが含まれている。第二に、こうした理論と実践の手続きとの関係をあきらかにする「ひとつの可能性」として、「物語におけるディスクール」がある (IQ: 119=206) ということ。つまり、そのような関係をいわば体現している書き方の一つのモデルとして、物語る、という書き方／語り方に注目する、ということであろう。セルトーによれば、「実践を物語化する」ことは、「独自の手続きと戦術をそなえたひとつのテクスト的な「もののやりかた」」 (IQ: 119=206) なのである。

しかし、常識的に考えて、「物語」と、研究が通常生産する「学問的ディスクール」とは、異なるものではないのか。では、物語ることと、学問的なディスクールとはどのような関係にあるのか。セルトーにいわせれば、両者は実は別の二項ではない。曰く、学問的ディスクールには物語性 (narrativité) がたえずつきまとっている、しかもそれは排除しえない残滓ではなく、「ディスクールの不可欠の機能をになうもの」 (IQ: 119-120=206) である。

「物語の理論は実践の理論とわがちがたく結ばれているのであって、こうした物語 (récit)こそ実践の理論の条件であり同時にその生産でもあると考えねばならないのではないのか」 (IQ: 120=207)。疑問形ではあれ、これが、物語／学問的ディスクールとはどのようなものか、より限定的にいて、日常の実践論はどのように書かれうるのであろうのか、という問いに対するセルトーの見

通し、回答であろう<sup>(25)</sup>。

セルトーは、したがって「小説」や「民話」も科学的ディスクールにとって「ひとつのモデル」となりうるとし、さらに次のように続ける。物語性は、「古典主義時代の『記述 (Description)』』とは「根源的」な差異 (une différence) によって隔てられている (IQ: 102=208)。

「もはや物語においては、ある「現実」にできるだけ近づけようとする必要もなければ、テキストをそれが表示する「現実的なもの」によって権威づけたりする必要もない、ということだ。逆に、物語られた話 (l'histoire) は、フィクションの空間をつくりだす (crée un espace de fiction)」 (IQ: 120=208)。

これは、社会学の方法という文脈においては、ある意味で当惑する見解ではないだろうか。ここでいわれていることは、社会的「現実」を経験的にあるいは実証的に研究し記述ないし説明する、といった営みを旨とするような「科学的」「学問的」構えに根底から揺さぶりをかける。物語のディスクールは、「語り (narration)」であって「記述 (description)」ではない、「語りの技 (un art du dire)」である (IQ: 121=209)。description は、ラテン語の de、下降、分離等の意、と scribo、書く、からなり、書き写す、描写する、など、元の対象がそこにあることが含意されているといえる。社会学においても、記述するとはそのような手続きの意であろう。そうした「書き方」ではない、異なる書き方が求められている。

セルトーによれば、フーコーが力をみせたのは、「歴史というフィクションをつかって「離れ業」をやったのける芸」 (IQ: 121=209)、「語りの技」 (IQ: 121=210) においてであった。セルトーはフーコーを評して書く。「レトリックのうちでも最も手のこんだ手続きをつかい、描写的なタブロー (典型的な「歴史」の数々) と分析的なタブロー (理論的な弁別) とをたくみに配列しながら、フーコーはめざす読者にたいして明証性という効果をうみだしてゆき、… (中略) …全体の新しい「配合」を創造してゆく」 (IQ: 121-122=210)。このように評することで、セルトーはフーコーの仕事の価値を貶めているのでは決してない。むしろ逆に、その卓越した語りの技を高く評価しているといっていよう。というのも、ここまでの議論に従えば、ディスクールなき知られざるもの (l'insu) (IQ: 107=198) についてのディスクールは、語りの技の巧みな実践に他ならないからである。

## 5. 方法としての物語—生活世界における経験

日常実践にいかに関与するか。日常実践は、そこに創造性、システムへの抵抗の可能性が読み込まれる、もののやりかた／技として論じられるが、いたるところに紛れこんで隠されるとされ、経験的な対象として自明ではない。では、それにいかに関与するのか。セルトーの議論の

---

(25) セルトーは、こうした「もののやりかた」の例は、マルクスからフロイトにいたるまで数多くの研究に見出せるとし、フーコーも「そもそも「物語」しか書かない」と述べていたという (IQ: 119=206)。

読解から、ここまで以下をおおよその指針として得た。まず、明らかにする目標は、個々の実践の具体的なありようよりも、それらがしたがっている一定のフォルマリテ、操作のロジックである。その在り処として目を向けるべきは、民衆文化と知恵 (ratio) である。ゲームや民話などの例示により、「いたるところ」という語の茫漠さに対して、一定の見通しが与えられた。こうして、目標とその在り処について指針が得られた上で、そこに迫る方法として示されたのは、ディスクールなきものについてディスクールをつくる、その書き方として、端的に、物語る、という技の実践であった。セルトーはそれを学問的ディスクールに不可欠な要素であるという。だが、その書き方は、「記述」ではない、「現実」に近づけようとしたり「現実的」なものによって権威づけたりする必要がなく、「フィクションの空間」をつくりだす、などと説明され、通常の実践における書き方から隔たっているように思われ、たとえフーコーもそうしていたといわれても、俄には受容、実践しづらいことのように思われる。そこで本節では最後に、この物語るという方法は、日常の実践を研究しようとする者にとっていかなる営み、経験であるのか、シュッツらの生活世界と私たちの経験に関する議論を手がかりに理解を試み、経験的研究への見通しを展望することとしたい。

経験的な研究は、具体的な何かについての研究である。物語でいえば、主題がなければならない。では、ディスクールなきものなから、研究者はいかに自らが対象にしようとするものに光を当てたのか。ここに、「きりとる」という手続きが前景化する。研究者はまずきりと、次にそれを「ひっくりかえす」。この手続きの過程は、研究者にとっていかなる営み、経験なのか。

きりとることは、シュッツの議論に引きつけるなら、ある領野のうちである特定の事柄を主題化し、問題化すること (Schutz 1970=1996: 24-25=58-59) といひ換えられよう。「非問題の領野」において、何かが私の注意を引き、解釈活動の主題となる。あるものが、他のすべてのものに対して際立っているとき、そのものは、私にとってレリヴァンスをもっている、とシュッツは説明する (Schutz 1970=1996: 25=58)。「何らかのものがそれによって問題的なものとして構成される—そしてそれとともに、その領野が主題と地平とに構造化される—そうしたレリヴァンスの形式」をシュッツは「トピック的レリヴァンス」と呼んだ (Schutz 1970=1996: 26=60)<sup>(26)</sup>。Luckmannとの共著では、同様のことが「主題的レリヴァンス」(Schutz & Luckmann 1973=2015: 168=371) として論じられる。賦課されるか自発的にかかわらず、何かが私の注意をひき、問題化する。そして私は「自らの概念領野の主題核のうちにいま存在していることがらの意味」を把握しようとし (Schutz 1970=1996: 36=70)、研究であれば、ディスクールの生産、書くこと

---

(26) シュッツのこの議論において、説明に用いられるのはカルネアデスの、ヘビカローブかという問題であり、セルトーの方法はそれとは文脈を異にするが、形式的に同様の経験の過程として理解できるのではないか。シュッツが「問題」という語のギリシャ語の語源は、「対象」という語のラテン語の語源と同じであり、この事実は注目されて然るべき (Schutz 1970=1996: 26=60) と述べていることにも注目すべきであろう。

へに進むだろう<sup>(27)</sup>。「ある経験が問題になる過程、また問題的な経験と結びついた解釈（中略）、解釈の帰結の知識集積への沈殿」（Schutz & Luckmann 1973=2015: 182=363-364）—シュッツらによれば、この過程はすべてその者の「主観的なレリヴァンス体系によって条件づけられている」（Schutz & Luckmann 1973=2015: 182=363）。

このように考えるならば、セルトーが物語について述べていた、「記述」「現実」との関係は、理解可能、というよりむしろ、書き方としてそうなる他ない、と理解できる。というのも、シュッツらの議論にしたがえば、研究者の目前に、予めディスカールとは別個に近づくべき「現実」、ディスカールを外から権威づけるような「現実的なもの」は存在していないからである。日常実践が自明の対象として存在していないとは、まさにそういうことであった。「現実的なもの」は、語ること、書くことを通してそこに現われる。「フィクション」を直ちに虚構、作りもの、と解するもの、他方に「真の」「現実」「事実」を置く発想の上でのことであって、fictionも、もとを辿ればラテン語  *fingere* 、つまり  *figure* 、形作る、創作する、つくることの意である。研究者が自らのレリヴァンス体系によって条件づけられて、何ものかを主題化し問題化する、その経験を通して、ある主題について書くとすれば、その書き方は、セルトーのいう物語ることと、実はそれほど隔たった営みではないのではないか<sup>(28)</sup>。

シュッツらのこの議論は、物語るという方法がそれ自体日常実践に属する、とセルトーが述べていたことについても、重要な示唆を与えてくれる。セルトーは日常実践の研究に、二つの問題—一つの政治的問題の二側面—が「重くのしかかってくる」と述べていた（IQ: 44=97）。第一に、「いったい何の名においてわれわれは、こうした「術」を異なっている（ *différent* ）と語るのだろうか」。第二に、「いったいどこから（いかなる明確な場所から）われわれはその分析にとりかかるのか」（IQ: 44=97）。セルトー自身は、実践者たち／民衆と「われわれ分析者」のポジションの社会的、経済的、歴史的な差異へと話を展開していくが、シュッツらの議論は、この問題も、研究者のレリヴァンスの問題へと、一旦形式の水準に引き上げて考察することを可能にしてくれる。ある何かを「異なっている」ものとしてきり取る（そしてひっくりかえす）のは

(27) B. Highmore (Highmore 2006: ix) は、研究方法について、研究者が世界の中にいる仕方、世界とのコミュニケーションの仕方 (Highmore 2006: 2-3) と述べる。これは、ここで本稿がシュッツらの議論を通して研究者の方法を理解しようとする、その観点の取り方と近いように思われる。Highmore が「適用の論理」—既成の理論に適合するように対象を変化させる—に対して、事例の個別的な細部に詳細な注意を向ける、「発明の論理」(Highmore 2006: 4-5)、「発明的で生成的な接近」(Highmore 2006: 7) をセルトーの方法に見るのも同様であろう。このことは、本稿注(22)のセルトーの実証的方法批判とも呼応する。

(28) セルトーは、物語のモデルとして、M. ドゥティエンヌらのギリシア人の「メティス」の研究を挙げる (Détienne and Vernant 1972)。メティスは、「抽象や、命題的な知識や、言語中心主義的な公式や、知識の客観的な基礎の究明などの学問的関心」に対して、「定義や本質によっては公式化できないし、その対象は厳密な論理的証明に従うことのない流動する曖昧な状況」であるため、見えないものになってしまう (山本 2002: 201-202)。まさにディスカールなき知られざるものへの、物語的な接近であろう。

研究者であり、その経験過程は研究者のレリヴァンスに条件づけられている。

一旦研究者のレリヴァンスという問題設定をずらすならば、シュッツは、人びとの行為への接近に際して、行為者の「主観的観点」を採ることの重要性を述べた (Schutz 1976=1991: 8=26)。この観点からは、行為者のある行いが抵抗的であるとか創造的であるということは、当の行為者にとってそれがそのような意味を持つということ、より詳細に言えば、行為の「目的動機」(Schutz 1976=1991: 11=29-30) に、何かに抵抗する、何かを創造するということが含まれているという理解となるであろう。

再び、研究者の経験過程に話を戻すなら、翻って、物語るという方法において、主題化される実践が抵抗性や創造性をもつものとして見出され語られるとすれば、それは当の主体の主観、意図や意味づけによって担保されるのではない。研究者が、「自分自身のレリヴァンス体系」(Schutz & Luckmann 1973=2015: 182=364) のもとで、それを見出すのである。主観的なレリヴァンス体系は、それ自体、「広範に「社会化されて」おり、「共在者、同時代者のそれと広範に」類似しているが、全体として「生活史的に刻印」されている。それは、その人に「独自の所有物」(Schutz & Luckmann 1973=2015: 261=507) である。人はそのうちにあると同時に、反省的にレリヴァンスを注視すること (Schutz & Luckmann 1973=2015: 182=364) もできる。このことを踏まえるならば、日常実践について研究し書くことは、生活史的に刻印された主観的レリヴァンスのもとで人びとがそれぞれの場所でなんとかやっていく実践と形式的には変わらないものとして理解できる。ならばセルトーがそこに政治問題が重くのしかかるというのも道理であろう。

ここでは、これ以上シュッツらの議論に立ち入る余裕はないが、今後シュッツらの生活世界と人びとの経験に関する議論を重ね合わせることで、日常実践の研究方法、物語るという方法について、それ自体が日常実践に属するという意味も含めて、その手続きをより詳しく描き出し、経験的研究のためのガイドとしていくことができるのではないだろうか。

付記：本研究は JSPS 科研費22K01938および早稲田大学特定課題研究助成2025R-011による研究成果の一部である。

#### 引用指示文献

Ahearne, J., 1995, *Michel de Certeau: Interpretation and its Other*, Stanford: Stanford University Press.

Buchanan, I., 2000, *Michel de Certeau: Cultural Theorist*, Sage Publications.

Bourdieu, P., 1980, *Le sens pratique*, Les Editions de Minuit, Paris. (今村仁司・港道隆訳, 1988, 『実践感覚1』みすず書房).

Certeau, M. de, 1990, *L'invention du quotidien: 1. Arts de faire*, Paris: Gallimard. (山田登世子訳, 2021, 『日常実践のポイエティック』筑摩書房) (=IQ).

## 日常実践を物語る

- Certeau, M. de, L. Giard, P. Mayol, 1994, *L'invention du quotidien: 2. Habiter, cuisiner*, Paris: Gallimard. (Translated, T. J. Tomasik, 1998, *The Practice of Everyday Life: Volume 2: Living & Cooking*, Minneapolis: The University of Minnesota Press) (=IQ-2)
- Détienne, M., et Jean-Pierre Vernant, 1972, *Les Ruses de L'intelligence: La metis des Grecs*, Flammarion. (桜井直文訳(部分訳), 1986, 「しなやかな知恵—ギリシア人のメーティス(狡智)」『現代思想』1986-09, Vol.14(9): 150-163.)
- Foucault, M., 1969=2008, *L'archéologie du savoir*, Gallimard. (慎改康之訳, 2012, 『知の考古学』河出書房新社.)
- Gardiner, M., 2000, *Critiques of Everyday Life: An Introduction*, Routledge.
- Goffman, E., 1961, *Asylum: Essays on the Social Situation of Mental Patients and Other Inmates*, Doubleday Anchor. (石黒毅訳, 1984, 『アサイラム—施設被収容者の日常世界』誠信書房.)
- Highmore, B., 2006, *Michel De Certeau: Analysing Culture*, Continuum International Publishing Group.
- 川端浩平, 2012, 「二重の不可視化と日常実践—非集住的環境で生活する在日コリアンのフィールドワークから—」『社会学評論』63(2): 203-218.
- 草柳千早, 2023, 「二重性を設える——セルトーの日常実践論からゴフマンの共在研究へ」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』68: 109-23.
- , 2025, 「セルトーの日常実践論から健康管理を考えるための知識への視角／試論」『社会学年誌』66: 85-99. 早稲田社会学会.
- 松田素二, 2009, 『日常人類学宣言！—生活世界の深層へ／から』世界思想社.
- Schutz, A., 1970, *Reflections on the Problem of Relevance*, ed., R. M. Zaner, Yale University Press, (那須壽、浜日出夫、今井千恵、入江正勝訳, 1996, 『生活世界の構成—レリヴァンスの現象学』マルジュ社.)
- Schutz, A., 1973, *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, ed., M. Natanson, Martinus Nijhoff, (渡部光、那須壽、西原和久訳, 1983, 『アルフレッド・シュッツ著作集 第1巻 社会的現実の問題 [I]』マルジュ社.)
- Schutz, A., 1976, *Collected Papers II: Studies in Social Theory*, ed., A. Brodersen, Martinus Nijhoff, (渡部光、那須壽、西原和久訳, 1991, 『アルフレッド・シュッツ著作集 第3巻 社会理論の研究』マルジュ社.)
- Schutz, A. and T. Luckmann, 1973. *The Structure of the Life-World*, Translated, R. M. Zaner and H. T. Engelhardt, Jr., Northwestern Univ. Press. (那須壽監訳, 2015, 『生活世界の構造』ちくま学芸文庫.)
- Scott, J. C., 1985, *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance*, Yale University Press.
- 末本誠 2025, 「沖縄集落の日常実践がもつ社会教育的意味に関する一考察：字誌の沖縄戦記録を手がかりに」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』5(1): 39-51.
- 田辺繁治、松田素二編, 2002, 『日常実践のエスノグラフィー語り・コミュニティ・アイデンティティ』世界思想社.
- 山本幸司, 2022, 『狡智の文化史—人はなぜ騙すのか』岩波書店.